



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化のプロセス：M-GTAを用いた分析(fulltext)
Author(s)	渡邊,みな美; 竹鼻,ゆかり
Citation	東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 70: 185-195
Issue Date	2018-10-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/150201
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化のプロセス

— M-GTA を用いた分析 —

渡 邊 みな美*¹・竹 鼻 ゆかり*²

養護教育分野

(2018年6月29日受理)

WATANABE, M. and TAKEHANA, Y.: Family feelings about a university student's psychological growth: Analysis by modified grounded theory approach (M-GTA). Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 70: 185-195. (2018) ISSN 1880-4349

Abstract

[Background] Independence is an important development task in adolescence. However, independence of young people is occurring later in recent years. Young people depend on their parents for a longer time. Therefore, independence of young people must be examined in terms of their family relations.

[Purpose] This study was designed to clarify family-related feelings that progress along with university students' psychological growth.

[Method] The study participants were five fourth-year university students. Semi-structured interviews were conducted during October–November 2017. Interviewers asked for responses to the following: “How have your feelings about family changed from junior high school to university?” and “What experiences have an effect on feelings?” A modified grounded theory approach (M-GTA) method was used for data analysis.

[Result] The process began from the state of “psychological and financial dependence on family,” followed by “appreciation of parents,” and “developing an understanding of family relations.” Finally, they reach a state of “awakening to independence from parents.” Factors influencing this process were “interaction with children,” “parent acceptance of children,” “a chance to develop an understanding of family,” and “a chance to have good family relations.” Results demonstrate that “underlying feelings” such as confidence and appreciation for family continue.

[Conclusion] Developing an understanding of family is an important factor of university student independence. Furthermore, the positive feelings about the family are associated with better physical health. Therefore, it's necessary to continue asking children about family relations.

Keywords: family, psychological growth, university student

Department of School Health Care and Health Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

* 1 秋田市立勝平小学校 (010-1618 秋田市新屋松美が丘北町 14-1)

* 2 東京学芸大学 養護教育講座 養護教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

要旨: 背景; 自立は青年期の重要な発達課題であるが, 近年若者の自立が遅れ親への依存が長期化している。そこで, 大学生の自立とは何か大学生の家族との関係性の観点から検討する必要がある。

目的; 本研究の目的は, 大学生の心理的成長に伴い家族への気持ちと態度はどのように変化していくのかを明らかにすることである。

方法; 家族との関わりに様々な思いを持つ大学4年生5人を対象とし, 倫理的配慮をした上で2017年10月~11月にかけて半構造化インタビューによる調査を行った。インタビュー内容は, 中学・高校を経て現在の大学生に至るまで家族への思いや認識がどのように変化したか, 思いの変化に影響を与えた出来事や経験はあるかなどである。分析にはM-GTA法を用いた。

結果; 家族への気持ちと態度の変化のプロセスはまず, 中高生の頃の【家族への精神的, 金銭的依存】にある状態から始まる。その後, これまでの親の支えに気づき【親への感謝】の気持ちが芽生える。そして, 【家族関係の捉え直し】をし始め自身の家族を客観的に肯定的に捉えることができるようになり, 最終的に【親からの自立の芽生え】という段階に到達し, 親からの自立心が芽生えるようになることが明らかとなった。このプロセスに影響を与える要因としては, 【親の子供への関わり方】や【親の子供の姿の受け入れ】, 【家族について捉え直すきっかけ】, 【家族関係が良好化するきっかけ】があることが示された。また, 中学から大学まで心の底にあり続ける思いとして, 家族を信頼しているなどの【根底に抱き続ける思い】が継続的に存在していることも明らかとなった。

結論; 家族の捉え直しは, 大学生の自立を促す一つの要因となること, 家族への肯定的な思いは精神的健康の向上につながるということが明らかとなった。よって, 教職員等は子供たちに家族について問い直す機会を与えていくような支援を行う必要があることが示唆された。

1. はじめに

近年, 親から独立できない若者, 安定的な雇用を得られない若者, 自ら社会とのかかわりを持たない若者など, 若者の自立に関する社会的問題が関心を集めている¹⁾。一方, 大学生の時期は大人社会への参入の準備時期にあたり¹⁾, 親から自立し, 1人の大人として社会に出ていくことが求められる。この青年期においても親子関係は重要な問題であり, 青年が親をどのように捉えているかといった, 子の親イメージが青年の精神的健康に直接影響を与える²⁾。そこで, 大学生の自立支援や精神的健康を向上させる手立てを考えるためには, 現在の大学生がどのように家族を捉えているのかを明らかにする必要がある。

青年期の心理的自立は, 青年期の重要な発達課題である。エリクソンは, 青年期において, アイデンティティの確立, すなわち自分自身が何者であるかを十分に理解し, 自分の将来の進むべき道をしっかりと見つけていくために, 親からの心理的自立は重要であると述べている³⁾。大学教育においても, 卒業後の就職支援やキャリア支援教育に力がそそがれるようになっており⁴⁾, 大学生自身, 就職を間近に控え, 自立への意欲も高まっていくことが考えられる。しかし近年, 若者の自立が遅れ, 親への依存が長期化している⁴⁾。その原因として, 教育水準の上昇による大学の大衆化や, 晩婚化・非婚化が挙げられ, これにより子供が親から扶養される期間は長くなっている⁴⁾。特に, 大学生に

おいては, 進学で一時的に親元を離れても, 経済的にも日常生活の上でも親からのサポートを受け続けており, 家から離れることと自立することは必ずしも結び付いているとは言えない。依存と自立の間にいる若者が増える現代社会において, 大学生の自立を促すためには, 大人になるとはどういうことなのか, 大学生の家族の関係性の観点から改めて検討すべきである。

一方で, 家族の在り方も多様化してきている。家族は子供の生活基盤であり家庭生活における安心感や満足感が子供の家庭外での適応や精神的健康に影響を与えることも少なくない⁵⁾。しかし社会環境の変化に伴い家族の在り方が変化してきている現代社会においては, 家族形態の多様化や, 虐待や家庭内暴力などの家族に関する様々な問題が取りざたされている。具体的には, 少子化や核家族化, 女性の社会進出が進み, 家族間のコミュニケーションが希薄化していること, 虐待や家庭内暴力, 育児放棄など養育力の低さが強調されていることなどがある。核家族世帯は, 1955年から1990年の35年間で増加傾向にある⁶⁾。厚生労働省の行った全国母子世帯等調査⁷⁾では, 母子世帯数は父子世帯数の8倍以上であり, 母子家庭の貧困などの問題を極めている。厚生労働省が提供する児童虐待相談対応件数の推移⁸⁾では, 児童虐待の件数は年々増加の傾向にある。そのなかでも, 心理的虐待が増加している。このように, 子供を育む家族の力が脆弱化している。また, 夫婦関係や親の子供への愛情及び養育態度などが子供に与える影響については多くの研究が行われて

いる⁵⁾。いくつかの先行研究では、親からのサポートの程度が高いほど、子供の心理的ウェルビーイングが高まることを示している⁹⁾。また、中学生とその母親の情緒的サポートが高まるほど、子供の自尊心が高まることを明らかにしている¹⁰⁾。このように、親の養育行動や親との関係が子供の精神的健康に影響を及ぼすことは明らかである。

その一方で、子供が親や家族関係をどのように認知しているかを明らかにした先行研究は少ない。そのなかでも青年の親に対する認知の重要性に関する研究では、青年期においては親の養育態度よりも青年が親をどのように捉えているか、評価しているかといった、子の親イメージが精神的健康に影響を与えると示唆している²⁾。そこで、青年期とりわけ今後社会人となる手前の大学生が親から自立し精神的に成長を遂げるためには、現代の大学生がどのように親を捉えているのかをまず明らかにする必要がある。それにより、大学生の自立と精神的健康を高める手立てを考えることが可能になる。

よって、本研究では、大学生の心理的成長に伴い、家族への気持ちと態度はどのように変化していくのかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2. 1 対象

家族との関わりに様々な思いを持つ大学4年生5人を対象とし、2017年10月～11月にかけてインタビュー調査を行った。対象者の属性の詳細は表1に示すとおりである。

2. 2 調査方法

調査はあらかじめインタビューガイドを作成し、半構造化インタビュー法を用いて行った。インタビューは対象者1人につき1回、面接時間は40分～50分程度で行った。インタビューの記録は対象者の同意を得て、ICレコーダーで録音し、その場でメモを取る方法

を用いた。

インタビューでは、インタビューガイドを用い、中学・高校を経て、現在の大学生に至るまでに家族への思いや認識がどのように変化したか、思いの変化に影響を与えた出来事や経験はあるかなどについて語ってもらった。

なお、結果を記すにあたり、変化のプロセスにおいて時期が特定できる場合は、中高生、大学生と記し、時期が特定できない場合または中高生以前の場合は子供と記した。

2. 3 分析方法

分析には、実証的・帰納的研究方法であるModified Grounded Theory Approach (M-GTA) を用いた¹¹⁾。M-GTAは、データの持つ文脈性を重視する分析方法であり、現象ごとの影響要因や行動推移のパターンといったプロセス性を持つはじめとの分析と理解に適している¹²⁾。また、M-GTAは研究者が研究意義を明確にしている研究テーマにより限定した範囲内において、社会的相互作用に基づく人間の行動を説明し、予測することに優れたプロセス性のある理論を生成するための質的研究方法である¹³⁾。

本研究では、分析テーマを「大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化」とし、分析対象者は「家族との関わりに様々な思いを持つ大学4年生」に設定した。分析の手順は、まずデータに基づき概念を生成し継続的比較分析により概念同士の関係を個々に検討した。そして、類似性にそって複数の概念との関係で構成されるサブカテゴリーを生成、さらにサブカテゴリー同士の関係からなるカテゴリーを生成した。なお、インタビューは、一定程度のデータが得られ、分析テーマに関する解釈が可能となった時点で終了した。

さらに、分析の信頼性・妥当性の確保について説明する。M-GTAはデータの解釈を始めとし、一貫して研究者の関心が重視される¹⁴⁾。そこで、妥当性を保持するため研究疑問を持った研究者の1名がデータの収集から分析までを一貫して行った後、適宜共同研究者とともに分析ワークシートをもとに繰り返し分析結果の批判的検証を行った。

次に、具体的な手順について説明する。まず、研究者の1名が研究疑問に基づいてインタビューを行ったうえで、逐語録から分析ワークシートを作成した。分析ワークシートは、M-GTAの基礎的分析作業であるデータからの概念生成を行うための書式であり、データ、定義、概念名、理論的メモからなる¹³⁾。分析ワー

表1 対象者の属性

対象者	年齢	性別	生活形態	家族構成
A	23	男	1人暮らし	父, 母
B	22	女	実家	父, 母, 姉, 弟
C	22	女	1人暮らし	母, 姉, 妹, 妹, 弟
D	22	男	1人暮らし	父, 母, 姉
E	24	女	1人暮らし	父, 母

クシートの作成にあたっては、まず、研究疑問の具体例としてデータを抜き出して記入し、さらにそのデータの解釈を検討して定義を定め、さらにそこから概念名を作成した。分析ワークシートの理論的メモには、1名のインタビューデータがほかのデータの類似例にあたること、その事例とは反対の意味や事象を表す対局例であること、などの場合に記入した。また、類似例が増えるごとに定義とデータ、理論的メモを照らしてその内容を検討した。この一連の手続きによって定義や概念に修正を加え精度を高めた。生成した概念はカテゴリー化し結果図を作成した。

その後、概念やカテゴリー、結果図については、過去にM-GTAを用いた研究を行ったことがある大学教員1名と同研究室に属する学生2名により検討をし、修正を重ねた。さらに、共同研究者によるスーパーバイズを受けた。

なお、結果を記すにあたり、生成されたカテゴリーは【】、サブカテゴリーは[]、概念は〈 〉、ヴァリエーションは「 」で表した。また、必要に応じて補足部分を()、省略部分については(略)で記した。

3. 倫理的配慮

調査対象者には、口頭と文書で研究の目的・方法、研究への参加が自由意志に基づくこと、随時拒否と撤回が可能であること、データ管理とプライバシーの保護について説明し、文書で同意を得た。

4. 結果

M-GTAによる分析から、20の概念を生成し、それ

らを13のサブカテゴリーにまとめ、さらに9つのカテゴリーに統合した。この9つのカテゴリーを用いて「大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化」を図に示し(図1)、ストーリーラインをまとめた。

4. 1 「大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化」のストーリーライン(図1)

家族への気持ちと態度の変化のプロセスはまず、中高生の頃の【家族への精神的、金銭的依存】にある状態から始まる。ここでは、親に反抗する気持ちから[反発する態度]をとったり、親を[当たり前存在]であると考えたりしている。その後、これまで親に支えられていたことに気づき、【親への感謝】の気持ちが生える。感謝の気持ちが生えるプロセスに影響を与える要因としては、【親の子供への関わり方】や【親の子供の姿の受け入れ】、【家族について捉え直すきっかけ】、【家族関係が良好化するきっかけ】がある。その後、【家族関係の捉え直し】をし始め、自身の家族を客観的かつ肯定的に捉えることができるようになり、最終的に【親からの自立の芽生え】という段階に到達し、親から自立したいという気持ちが生えるようになることが明らかとなった。また、中学から大学まで心の底にあり続ける思いとして、家族を[信頼のおける存在]と捉える【根底に抱き続ける思い】が継続的に存在していた。

4. 2 各カテゴリー

4. 2. 1 【家族への精神的、金銭的依存】(表2)

このカテゴリーは中高生の子供が家族に精神的にも金銭的にも依存している段階を示しており、[反発す

表2 【家族への精神的、金銭的依存】のサブカテゴリー、概念名、定義、ヴァリエーション例

サブカテゴリー	概念名	定義	ヴァリエーション例
反発する態度	親と会話することを面倒くさく思う	親と話をしたり、学校や部活のことを聞かれたりすることを面倒くさく思う	いちいちいろいろ(親に)聞かれるのが面倒くさかったから。親がいるよりも友達といるほうが好きだった。だから基本俺もあんま家に帰らなかった。
	親に干渉されたくない	親に自分自身のことで干渉されることを嫌がる	浪人の時が一番干渉してきたかなって思う。受験のことで、成績とか聞かれたりとか。(略)うっとうしかった。
当たり前の存在	家族を必要不可欠と捉えつつも、家族に対して深く考えない	家族の存在は必要不可欠だと思いつつも、家族との関係性などに関して深く考えることはない	中高生の時はあえて、家族のことを考えることもなかった。
	親から支えられていることを当たり前と思う	親から金銭面や生活面で支えられていることを当たり前と思う	特に両親には、金銭的な面とか生活面では支えて貰ってて、それが当たり前じゃないけど、お父さんお母さんってそういう感じかなっていうふうにはか思ってた。

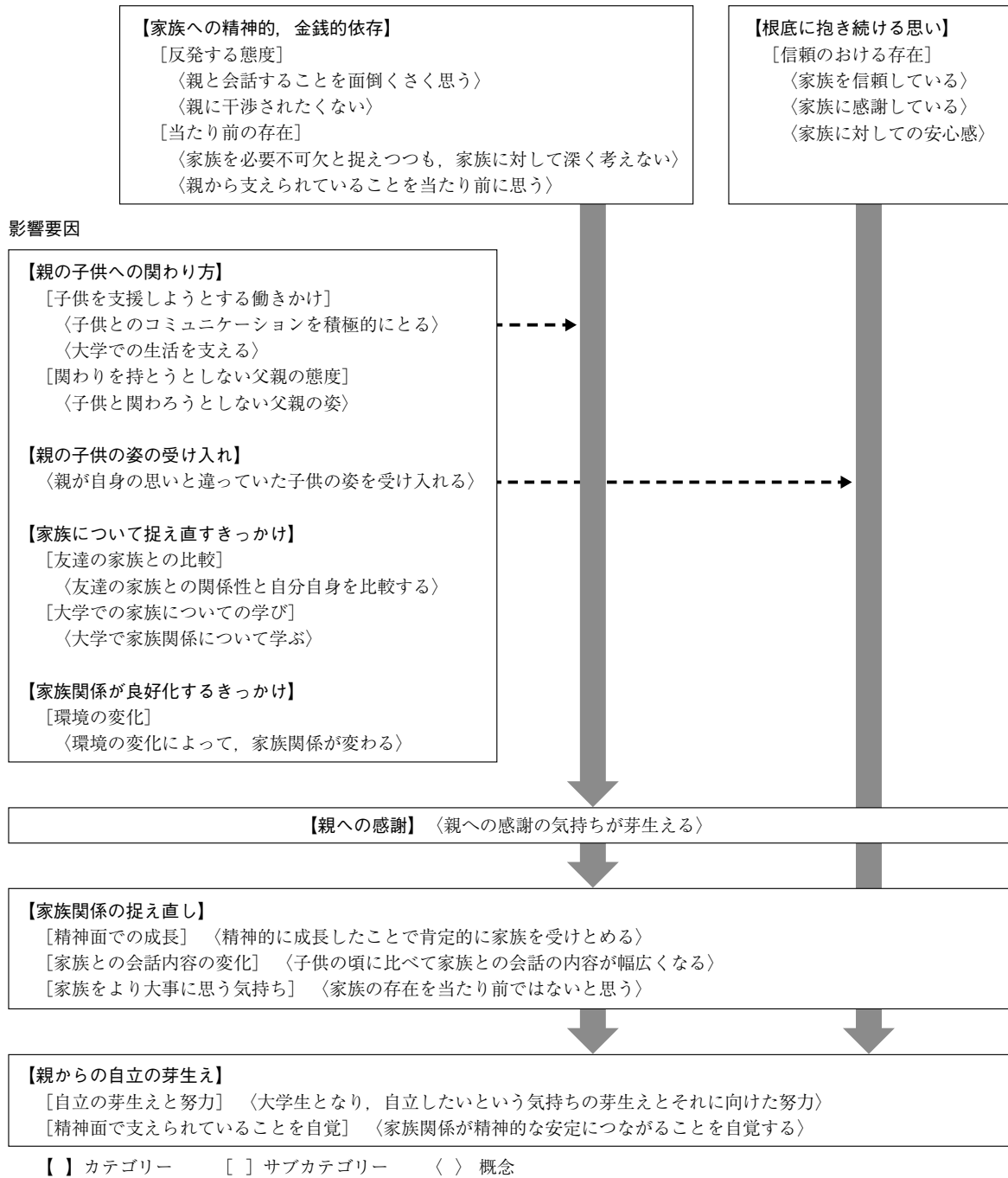


図1 大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化のプロセス

る態度]と[当たり前の存在]の2つのサブカテゴリーから構成される。

まず, [反発する態度]は, 両親に反発心を抱いている子供の状態を示しており, 2つの概念からなる。〈親と会話することを面倒くさく思う〉では, 親と話をしたり, 学校や部活のことを聞かれたりすることを面倒くさく思う気持ちが語られた。〈親に干渉されたくない〉では, 親に自分自身のことで干渉されることを嫌がる様子が語られた。

次に, [当たり前の存在]は, 家族や親の存在を深く考えず, 金銭面や生活面での援助を当たり前と思う子供の状態を示しており, 2つの概念からなる。〈家族を必要不可欠と捉えつつも, 家族に対して深く考えない〉では, 家族の存在は必要不可欠だと思いつつも, 家族との関係性などに関して深く考えることはない様子が語られた。〈親から支えられていることを当たり前と思う〉では, 親から金銭面や生活面で支えられていることを当たり前と思う気持ちが語られた。

4. 2. 2 【根底に抱き続ける思い】(表3)

このカテゴリーは心の底にあり続ける家族への思いを示しており、[信頼のおける存在]のサブカテゴリーからなる。

[信頼のおける存在]は、家族を信頼のおける存在として捉えている子供の思いを示しており、3つの概念からなる。〈家族を信頼している〉では、悩みはいつも家族に相談するなど家族に信頼感を抱いている様子が語られた。〈家族に感謝している〉では、昔から家族には感謝の気持ちを持っていることが語られた。〈家族に対しての安心感〉では、家族と一緒に過ごす安心感や自身を受け入れてくれることに安心感を抱えていることが語られた。

4. 2. 3 【親への感謝】(表4)

このカテゴリーは一人暮らしやアルバイトなどの経験を経たことによって、これまでの親の支えに気づき感謝の気持ちが芽生える段階を示しており、〈親への感謝の気持ちが芽生える〉の概念からなる。

〈親への感謝の気持ちが芽生える〉では、親に生活面、精神面、金銭面で支えられていたことに気づき、感謝の気持ちが芽生える様子が語られた。

4. 2. 4 【家族関係の捉え直し】(表5)

このカテゴリーは自分の家族について子供の頃とは違った捉え方をするようになる段階を示しており、[精神面での成長][家族との会話内容の変化][家族をより大事に思う気持ち]の3つのサブカテゴリーから構成される。

まず、[精神面での成長]は、大学生となり精神面で成長し、家族に対する受けとめ方が変化した状態を示しており、〈精神的に成長したことで肯定的に家族を受けとめる〉という概念からなる。精神的に成長したことで家族の存在を客観的に捉え直し、肯定的に受けとめられるようになることが示された。

次に、[家族との会話内容の変化]は、成長に伴い、家族との会話の内容が変化し、家族との関係性が深まる状態を示しており、〈家族との会話内容の変化〉という概念からなる。家族間での会話の内容が学校生活のことだけではなく、政治など幅広くなり、家族の関係性が変化したり、家族への理解が深まったりすることが示された。

次に、[家族をより大事に思う気持ち]は、家族について捉え直した結果、以前よりもより家族を大事にしようと思う心理的变化を示しており、〈家族の存在を当たり前ではないと思う〉という概念からなる家族の存在を当たり前ではなく、大事にするべき存在であると

表3 【根底に抱き続ける思い】のサブカテゴリー、概念名、定義、ヴァリエーション例

サブカテゴリー	概念名	定義	ヴァリエーション例
信頼のおける存在	家族を信頼している	悩みはいつも家族に相談するなど家族に信頼感を抱いている	やっぱり一番裏切らないでいてくれるというか、一番相談もしやすいし、気を使わないでいられる関係でもあり、信頼がおける相手であると思っています。
	家族に感謝している	昔から家族には感謝の気持ちを持っている	基本的に、家族に対して感謝してるっていうか、自分がやりたいことをやらせてもらったりして、他の姉弟がいる中でそれなりにやりたいことやらせてもらえてたから、反抗ってよりは感謝の方が多くて。
	家族に対しての安心感	家族と一緒に過ごす安心感や自身を受け入れてくれることに安心感を抱いている	たまに会うときは、あっちも気使ってくれてるのかはわからないけど、普段通りにしてくれるし、家では家の過ごし方みたいな。安心感っていうか。中高の時みたいにゆっくりさせてもらってるなって感じ。そのころと変わらず。

表4 【親への感謝】の概念名、定義、ヴァリエーション例

概念名	定義	ヴァリエーション例
親への感謝の気持ちが芽生える	親に生活面、精神面、金銭面で支えられていたことに気づき、感謝の気持ちが芽生える	ありがたみとかが分かるようになったのは家を出てから。自分で生活するようになって。浪人のときもお金とかは感じ始めてたけど、バイトとかはしてなかったし。

表5 【家族関係の捉え直し】のサブカテゴリー、概念名、定義、ヴァリエーション例

サブカテゴリー	概念名	定義	ヴァリエーション例
精神面での成長	精神的に成長したことで肯定的に家族を受けとめる	精神的に成長したことで家族の存在を客観的に捉え直し、肯定的に受けとめられるようになる	家族で集まる時間を親は大事にしてたから。私も今はそういう時間が一番大事だと思うし、大学生の友達との関係も大切にしたいから、どっちもいっぺんにはできないけど、大学生生活落ち着いてきたら自然と家族にも接せるようになって。
家族との会話内容の変化	子供の頃に比べて、家族との会話の内容が幅広くなる	家族間での会話の内容が学校生活のことだけではなく、政治など幅広くなり、家族の関係性が変化したり、家族への理解が深まったりする	話す内容も中高生の時とは全然違う話題を話したりとか、深い話をしたりとか、それまでは学校生活とか勉強の話しかしなかったのが、例えば政治の話とか、抽象的な話題を話すようになったので、お互いにどんな考え方なのかをより感じるようになったし、家族個々の個性なんかも知るようになった。
家族をより大事に思う気持ち	家族の存在を当たり前ではないと思う	家族の存在を当たり前ではなく、大事にするべき存在であると考えようになる	より家族を大事にしなきゃいけないんだとか、当たり前じゃないんだなって中高生の時よりも感じるようになりました。

考えるようになる様子が語られた。

4. 2. 5 【親からの自立の芽生え】(表6)

このカテゴリーは、大学生として親から自立したいと考えるようになる段階を示しており、[自立の芽生えと努力]と[精神面で支えられていることを自覚]の2つのサブカテゴリーから構成される。

まず、[自立の芽生えと努力]は、大学生として親から自立したいという気持ちの芽生えとそれに向けて努力する態度を示しており、〈大学生となり、自立したいという気持ちの芽生えとそれに向けた努力〉という概念からなる。大学生となり、ある程度のことは自分自身でできるようになり、今まで金銭面、生活面、精神面で親に依存していた関係ではなく、親から自立したいという気持ちが芽生え、自立に向けて努力する

ようになる様子が語られた。一方で、実家で暮らす大学生は、いまだに金銭面、生活面、精神面で親に依存していると感じており、自立のためには自身の成長が必要であると考えていることが示された。

次に、[精神面で支えられていることを自覚]は、〈家族関係が精神的な安定につながることを自覚する〉という概念からなる。家族関係の良い悪いや家族と過ごしていた時間が自身の精神的な安定につながっていたことを自覚する様子が語られた。

4. 3 大学生の気持ちと態度の変化のプロセスに影響を与える要因(表7)

大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化のプロセスに影響を与える要因として、【親の子供への関わり方】【親の子供の姿の受け入れ】【家族に

表6 【親からの自立の芽生え】のサブカテゴリー、概念名、定義、ヴァリエーション例

サブカテゴリー	概念名	定義	ヴァリエーション例
自立の芽生えと努力	大学生となり、自立したいという気持ちの芽生えとそれに向けた努力	大学生となり、ある程度の事は自分自身でできるようになり、今まで金銭面、生活面、精神面で親に依存していた関係ではなく、親から自立したいという気持ちが芽生え、自立に向けて努力するようになる	自分で自分のことはできるしっていうか。大学入ってそれなりにバイトとかも初めて、自立してきたって思いがあった。(略)合宿費とかもなるべく自分で出してたし。生活面でも自立したし、気持ち的にも自分でやろうって思った。 実家生だから、依存してるなってのは感じて、親離れ兄弟離れは自分が成長するためにはしなきゃいけないのかなって思うことは多々ある。
精神面で支えられていることを自覚	家族関係が精神的な安定につながることを自覚する	家族関係の良い悪いや家族と過ごしていた時間が自身の精神的な安定につながっていたことを自覚する	大学生になってから、一人暮らし始めて、家事とかいろんなことをやってくれてたっていうありがたさとか、一人で暮らすっていう精神的な負担も、家族でいることで、すごい安定してたんだなって気づいた。

ついて捉え直すきっかけ】【家族関係が良好化するきっかけ】の4つのカテゴリが生成された。

4. 3. 1 【親の子供への関わり方】

このカテゴリは、親の子供への態度や関わり方が子供の成長プロセスに影響を与える要因となっており、[子供を支援しようとする働きかけ]と[関わりを持つとうとしない父親の態度]の2つのサブカテゴリから構成される。

まず、[子供を支援しようとする働きかけ]は、子供

とコミュニケーションをとったり、子供の生活面を支えたりする親の姿を示しており、2つの概念からなる。〈子供とのコミュニケーションを積極的にとる〉では、子供が悩みを話しやすいような接し方や学校生活に関する会話を積極的にしようとする親の姿が語られた。〈大学での生活を支える〉では、親として金銭面で子供の大学生活を援助している様子が語られた。

次に、[関わりを持つとうとしない父親の態度]は、子供との関わりをあまり持つとうとしない父親の姿を示しており、〈子供と関わろうとしない父親の姿〉とい

表7 影響要因のカテゴリのサブカテゴリ、概念名、定義、ヴァリエーション例

カテゴリ	サブカテゴリ	概念名	定義	ヴァリエーション例
親の子供への関わり方	子供を支援しようとする働きかけ	子供とのコミュニケーションを積極的にとる	子供が悩みを話しやすいような接し方や学校生活に関する会話を積極的にしようとする	話しかけられるっていう面では父のほうが多いかな。勉強どうなのとか部活のこととか。
		大学での生活を支える	親として金銭面で子供の大学生活を援助している	お金大丈夫なの？とか聞かれるから。
	関わりを持つとうとしない父親の態度	子供と関わろうとしない父親の姿	父親の中には子供との関わりが少なく、子供のことに関して無関心にも感じる態度をとる人もいる	お父さんは、見て見ぬふりじゃないけど、あんま関わってこられた印象が無くて、たまに言うけど年一くらい。全然言うてこない。
親の子供の姿の受け入れ		親が自身の思いと違っていた子供の姿を受け入れる	親が思い描いていた子供の姿と現状の子供の姿が違ったが、それを親が受け入れられるようになる	親も、私が学校行ったら行ったで楽しんでるのわかってて。休んで、しばらくして学校行くのは行きづらいとかで、行けない時期もあったんだけど、でも行ったら、なんで来なかったのとかやいやい言うてる子がクラスにもあんまいなくて、オー来たな！みたいな子が多くて、楽しんでるし、部活も頑張ってるし、友達もいるしって感じで、親は安心し、犬も来てほんわかしてきたとこだったんだと思う。
家族について捉え直すきっかけ	友達の家族との比較	友達の家族との関係性と自分自身を比較する	友達の家族との関係性と自分自身の家族を比較し、客観的に自分の家族を捉えるようになる	一人暮らしの子が周りに多くて、その子たちの家族と離れているっていう話を聞いたりとか、中には家族と上手くいってない友達の話とかを聞いたりとかすると、私はこの家族の一員でよかったなというか、より自分の家族環境に感謝するようになったりとか。
	大学での家族についての学び	大学で家族関係についての学び	大学で家族関係について学び、様々な家族の形を知る	例えばニュースで、家族が不仲で事件があるとか、(略)教育大学だから、家族の話を教授から聞いたこととか、ニュースとかを見て学んで、自分は家族と良好なんだって気づくことができた。
家族関係が良好化するきっかけ	環境の変化	環境の変化によって、家族関係が変わる	怪我での入院や、一人暮らし、アルバイト、ペットを飼うなど、環境の変化が家族関係を良好化させるきっかけとなる	看護師さんに、親が毎回置いてったの、物を。俺はなんか何にも見ないで、うん。って返事だけしてなんもさわりもしてなかったんだけど、カレーとかビーフシチューとかクラムチャウダーとかそういうのをミキサーにかけて、口縛ってて口開けなかったから、固形物食べられなかったの。流動食ばっかだったけら。それを飲めるような形にして、ミキサーとかで。

う概念からなる。父親の中には子供との関わりが少なく、子供に無関心とも思える態度をとる人もいることが語られた。

4. 3. 2 【親の子供の姿の受け入れ】

このカテゴリーは、親が思い描いていた姿と違う子供の姿を受け入れる状態を示しており、〈親が自身の思いと違っていた子供の姿を受け入れる〉という概念からなる。親が思い描いていた子供の姿と現状の子供の姿が違ったが、それを親が受け入れられるようになる様子が語られた。

4. 3. 3 【家族について捉え直すきっかけ】

このカテゴリーは、大学生が自身の家族関係について捉え直すきっかけを示しており、[友達の家族との比較]と[大学での家族についての学び]の2つのサブカテゴリーから構成される。

まず、[友達の家族との比較]は、友達と自分の家族との関係性を比較し、家族について客観的に捉え直す段階を示しており、〈友達の家族との関係性と自分自身を比較する〉という概念からなる。友達の家族との関係性と自分自身の家族を比較し、客観的に自分の家族を捉えるようになる様子が語られた。

次に、[大学での家族についての学び]は、大学での家族関係についての学びが家族関係の捉え直しに影響していることを示しており、大学で家族関係について学び、様々な家族の形を知る様子が語られた。

4. 3. 4 【家族関係が良好化するきっかけ】影響要因

このカテゴリーは、家族関係の良好化に影響を与えている要因を示しており、[環境の変化]のサブカテゴリーから構成され、〈環境の変化によって、家族関係が変わる〉という概念からなる。怪我での入院や、一人暮らし、アルバイト、ペットを飼うなど、環境の変化が家族関係を良好化させるきっかけとなることが語られた。

5. 考察

本研究は、家族との関わりに様々な思いを持つ大学4年生に行ったインタビューから、家族への気持ちと態度の変化に関する概念をまとめ、中学・高校・大学を経て依存から自立へのプロセスを明らかにした。本結果では、中高生の頃は家族に精神的にも金銭的にも依存した状態にあり、そのような精神的な甘えから、

親に反抗的な態度をとったり、親からの援助を当たり前にも思ったりしていることが示された。その一方で家族信頼する気持ちもあり、様々な家族への思いが入り交じっている時期である。その後、これまでの親の支えに気づき、感謝の気持ちが生まれ、家族関係を捉え直す段階に至る。ここで特筆すべきは、客観的に物事を見られるようになった大学生の成長が、家族の捉え直しに影響を与えていることである。また、この捉え直しは、大学生の精神的健康の向上にもつながる。そして、捉え直しをしたからこそ自立心が芽生えることが示された。さらに、家族の捉え直しと大学生の自立は別々の事柄ではなく、互いに影響し合っており、家族の捉え直しは自立を促す一つの要因となることが明らかとなった。本結果から捉え直しと自立心の両方の気持ちが成熟することで、大学生は大人へのステップを歩んでいくことが示された。

これまで、夫婦関係や親の子供への愛情及び養育態度などが子供に与える影響については膨大な研究が蓄積されてきた⁵⁾が、子供が親や家族関係をどのように認知しているかを捉えた先行研究は少ない¹⁵⁾。青年期にあたる子供の家族への気持ちと態度の変化のプロセスが明らかになったことは本研究の成果であり、今後、子供の家族の受け入れや捉え直しを念頭においた親と子供の関わり方や、子供自身への教育に貢献することが期待される。

次に、大学生の心理的成長に伴う家族への気持ちと態度の変化のプロセスと大学生の成長発達に焦点を当てて考察する。

【家族への精神的、金銭的依存】の段階は、中高生の時期に見られ、ちょうど第2反抗期にあたる。第1反抗期に比べ、第2反抗期は、反抗の対象が親、教師、年長者から社会権威や制度にまで及ぶが、特に激しい反抗を示すのは親に対してである¹⁶⁾。ピーター・ブ罗斯は、青年期前期、中期は親から分離し始め友人や自己への関心が向く時期としている¹⁷⁾。また子の親離れを心理的離乳と捉えた研究では、中学生は親から離れるための苛立ちや不安があるとされている¹⁸⁾。つまり、親の存在を面倒くさく思ったり、親に干渉されたくないと感じたりする子供の[反発する態度]は自然な反応であり、親から離れたたいという分離欲求や精神的な自立によるものである。また、本研究では、反発する子供の態度とは別に、親を[当たり前の存在]と思う子供の気持ちが示された。これは、親に金銭面でも生活面でも支えられていることを当たり前にも思っている精神的にも甘えた状態であり、家族が自分にとってどのよう

な存在かを深く考えていないことが対象者の語りから読み取れる。しかし、中高生の時期は、精神的にも未熟であり、職業に就いてもいないため、金銭面、生活面、精神面のすべてにおいて親への依存度が高くなることは必然である。

一方、本研究では、【根底に抱き続ける思い】として、反発する態度とは反対に家族を「信頼のおける存在」と捉えている子供の姿が示された。先行研究^{16) 18)}では反発する子供の態度を明らかにしているが、子供は親への対立や葛藤を抱えながらも、一番信頼のおける存在であると考えていたり、自身を受容してくれることに安心感を抱いていたりすることが明らかとなった。このように、中高生の時期は、親に反発する気持ちと信頼する気持ちの両方を持ち合わせている。よって、この2つの気持ちを理解したうえで親や教職員は子供と関わり、支援を検討・実施していく必要がある。

また、青年期の親子関係の発達のプロセスの研究では、青年期は親の視点に立って考えられるようになると、これまでの親に対する見方を変化させ、親への感謝や尊敬などの気持ちが高まる。こうして親を捉え直した後、最終的には親へのイメージを統合し、モデルとして受け入れることができる¹⁹⁾。これは、【親への感謝】という段階に当てはめて考えることができる。高校生から大学生にかけて、様々な環境の変化があり、例えば大学入学を機に親元を離れ、初めて自分でお金を稼いだり、家事などを行ったりして、これまでの親の支えに気づき感謝することが示された。親への感謝の気持ちが芽生えるきっかけは人それぞれであるが、親に対する見方がこれまでと変化し、親の視点になって考えられるようになること、物事を客観的かつ多面的に見られるようになるという発達が影響している。これは先行研究を支持する結果となった。

さらに、この客観的に見られるようになるという成長は、【家族関係の捉え直し】にも影響を与えている。この段階の「精神面での成長」とは、親の認知の変化、つまりは物の見方の変化であると考えられ、青年期の葛藤の時期を越え、大学生として気持ちの余裕が生まれていることが対象者の語りからも読み取れる。また、青年の親に対する認知の重要性を明らかにした研究では、青年が親をどのように捉えているかといった、子の親イメージが青年の精神的健康に直接影響を与えることが示されており²⁾、これは本研究の知見と一致している。大学生が家族の存在を客観的に捉え直し、肯定的に受けとめられるようになることは精神的健康の向上につながると言える。よって、教職員等は、子供たちに家族について問い直す機会を与えていくような

支援を行う必要がある。

【親からの自立の芽生え】は、大学生の家族への気持ちと態度の変化のプロセスの最終到達点であり、本研究において最も重要な点である。【自立の芽生えと努力】は、親から自立したいという気持ちの芽生えとそれに向けて努力する大学生の態度を示しており、この自立の芽生えは、中高生の頃のような単なる分離欲求ではなく、家族の捉え直しをし、まだ家族に依存している自分の姿を自覚したからこそ芽生える意識である。大学生の自立の実態を明らかにした研究では、親との共生的な関係が自立の要素に含まれることを示している¹⁾。このことから、家族を捉え直すことは、自立を促す一つの要因となることが示唆された。「家族の捉え直し」と「大学生の自立」は一見別々の事柄に見えるが、捉え直しをしたからこそ自立に踏み出すことができ、この2つは互いに影響し合っていることがわかる。捉え直しと自立の両方の気持ちが成熟することで、大学生は本当の意味での自立に向かい、大人へと成長していくと言える。一方、実家生は一人暮らし生よりも、生活面でいまだに親に依存していると感じていることから、生活力を高めるなど、具体的な支援が必要である。

このプロセスに影響を与える要因として、【親の子供への関わり方】【親の子供の姿の受け入れ】【家族について捉え直すきっかけ】【家族関係が良好化するきっかけ】の4つが示された。ここで特に注目すべきは、【親の子供への関わり方】の「関わりを持とうとしない父親の態度」である。中学生の精神的健康と父親の家庭関与との関係を検討した研究では、父親の家庭への関与が多いほど中学生のすぐかっとなる、いらいらするというような神経症的傾向は低いことが示された²⁰⁾。このことから父親の家庭関与は子供にとってとても重要であるが、いまだに父親は子育てにおいては脇役であるという認識が無くならないことが問題であることが示された。各家庭によって父親の姿は異なるが、それぞれの家庭に合わせた父親の子育ての参加の方策を模索していく必要がある。

6. 本研究の限界

本研究では、中学・高校を経て、現在の大学生に至るまで家族への思いがどのように変化したかを明らかにしたが、プロセスの中で、思いが変化した時期が中学から大学までのどの時期にあたるかは特定できない。また、対象とした大学生5名の中で生活形態が実家であった者は1名しかいなかった。また、家族形態

も様々でひとり親家庭の子供も多くいる。そのため今後は生活形態や家族形態を限定してインタビューを行うことで、本結果のプロセスの検証と一般化が図ることができる。

7. 結論

本研究は、大学生の心理的成長に伴い家族への気持ちと態度はどのように変化していくのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。

その結果、9つのカテゴリー、13のサブカテゴリー、20の概念を生成した。大学生の家族への気持ちと態度の変化のプロセスは、中高生の頃の【家族への精神的、金銭的依存】にある状態から始まる。その後、これまで親に支えられていたことに気づき、【親への感謝】の気持ちが芽生える。そして、【家族の捉え直し】をし、家族を客観的かつ肯定的に捉えることができるようになる。最終的に【親からの自立の芽生え】という段階に到達し、親からの自立心が芽生えることが明らかとなった。また、中高生の頃から家族を信頼しているなどの【根底に抱き続ける思い】が心の底にあることも示された。

このことから、客観的に物事を見られるようになった大学生の成長が、家族の捉え直しに影響を与えていることが示された。また、家族の捉え直しは、大学生の自立を促す一つの要因となること、家族への肯定的な思いは精神的健康の向上につながる事が明らかとなった。

引用文献

- 1) 大石美佳, 松永しのぶ: 大学生の自立の構造と実態—自立尺度の作成—, 日本家政学会誌, 59 (7), 461-469, 2008
- 2) 大島聖美: 青年の親に対する認知の重要性—青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から—, 広島国際大学心理科学部紀要, 2 (1), 69-78, 2014
- 3) エリクソン, E. H.: 自我同一性 (小此木啓吾訳編), 誠信書房, 東京, 1973 (Erikson, E. H.: Identity and the life cycle. Psychological Issues, 1 (1), Monograph 1, International University Press, NY, 1959)
- 4) 宮本みち子: 少子・未婚社会の親子—現代における「大人になること」の意味と形の変化— (藤崎宏子編) 親と子交錯するライフコース, pp.183-210, ミネルヴァ書房, 京都, 2000
- 5) 野村あすか, 松本真理子: 子供が捉える家族に関する研究動向と文献紹介〈子供研究ノート4〉, 児童心理, 71 (12), 130-136, 2017
- 6) 山根常男, 玉井美知子, 石川雅信編著: 日本における家族の変化, わかりやすい家族関係学—21世紀の家族を考える—, pp.30-56, ミネルヴァ書房, 京都, 1996
- 7) 厚生労働省: 平成23年(2011)全国母子世帯等調査結果報告. Available at: http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-katei/boshi-setai_h23/ Accessed January 16, 2018
- 8) 厚生労働省: 平成27年(2016)児童相談所での児童虐待相談対応件数. Available at: <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html> Accessed January 16, 2018
- 9) 末盛慶: 思春期の子どもに対する親の養育行動に関する先行研究の概観—親の養育行動の次元構成及び子どもに与える影響について—, 日本福祉大学社会福祉論集, 117, 51-71, 2007
- 10) 末盛慶: 母親の養育行動と思春期の子どもの自尊心—文脈効果の検証—, 家庭教育研究所紀要, 22, 18-31, 2000
- 11) 木下康仁: 修正版M-GTAとほかのグラウンデッド・セオリー・アプローチ, グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—, pp.35-46, 弘文堂, 東京, 2003
- 12) 木下康仁: どんな研究に適しているか, グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—, pp.89-91, 弘文堂, 東京, 2003
- 13) 木下康仁: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の分析技法, 富山大学看護学会誌, 6 (2), 1-10, 2007
- 14) 木下康仁: ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法—, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの全て, pp.15-230, 弘文堂, 東京, 2007
- 15) 柏木恵子: 家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの視点—, 東京大学出版会, 東京, 2003
- 16) 小野寺敦子: 青年期を理解するための基礎理論, 親と子の生涯発達心理学, pp.113-139, 勁草書房, 東京, 2014
- 17) ピーター・プロス: 青年期の精神医学 (野沢英二訳), 誠信書房, 東京, 1971 (Blos, P.: On adolescence: A psychoanalytic interpretation, Free Press, NY, 1962)
- 18) 西平直喜: 大人になること, 生育史心理学から (人間の発達4), 東京大学出版会, 東京, 1990
- 19) 大島聖美: 青年期の家族関係—父・母・若者それぞれの心理的成長—, お茶の水大学博士論文, 76, 2013
- 20) 平山聡子: 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連: 父母評定の一致度からの検討, 発達心理学研究, 12, 99-109, 2001